

Title	第三史観の可能性(上)
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	経済論叢 (1935), 40(4): 637-657
Issue Date	1935-04-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/130581
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷十四第

行發日一月四年十和昭

論叢

第三史觀の可能性

文學博士 米田庄太郎

利子論序說

文學博士 高田保馬

時論

地方交付金配分標準としての人口

法學博士 神戸正雄

地方財政の不均衡と其の對策

經濟學博士 汐見三郎

研究

蘇聯國の工業金融制度に就いて

經濟學士 大塚一朗

海上保險に於ける重複保險填補について

經濟學士 佐波宣平

短期清算取引に於ける代行機關の機能

經濟學士 石田興平

說苑

補助貨幣の供給

經濟學士 中谷實

累進稅率決定に關する一方法について

經濟學士 柏井象雄

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

經濟論叢

第四十卷 第四號 (通卷第貳百參拾八號) 昭和十年四月發行

論叢

第三史觀の可能性 (上)

米田 庄太郎

- (一) 哲學の根本的方針に關する諸說の一般的考察 (二) 辨證法的唯物論の主張の考察 (三) フイヒテ說の考察
(四) デイルタイの世界觀典型論 (五) ジムメルの典型的精神性論 (六) 世界觀的或は哲學的人格典型說 (七) 哲學の第三根本方針

一、哲學の根本的方針の區別に關する諸說の一般的考察

私は本雜誌前號中の拙稿「第三史觀の概念」に於て述べし如く、第三史觀を一般的に規定して、夫れは相對立し、相排斥し合ふ觀念史觀と唯物史觀とを總合する史觀の唯一の第三方針、私自身の見る處では論理的に最高な唯一の方針であると、云はんとするのである。併しヤハリ同拙稿中に指示せる如く、かゝる意味での第三史觀は、只從來一般に哲學の根本的ニ大方針と認められて

居る觀念論及び唯物論と相並んで、或は夫れの上に、哲學の根本方針として一定の第三方針が樹立されるに於てのみ、可能であるのである。それで私は本論文に於て、哲學の根本方針としての一定の第三方針は、如何にして樹立され得るかを一般的に論述して、以て私の第三史觀は如何にして可能であるか、或は哲學的に基礎附け得られるかを簡単に證示したいと思ふ。就ては先づ、哲學の根本的方针としては觀念論と唯物論との二大方針があるだけであると見る、從來一般に行はれて居る見解を、批判的に考察することが必要である。要するに私はかゝる從來の見解を批判的に考察して、以て哲學の第三根本方針の可能性を論證したいと思ふ。

今此處で哲學の根本方針としては、只相對立する觀念論と唯物論との二者あるだけであると見る、從來一般に行はれて居る見解に就て、諸家の説を批判的に考察せんとするに當つて、先づ純理論的に且つ形式的に考察して、其等の諸説を分類すると、大體上其等の諸説は、(1)相對立する二つの根本方針としての、觀念論と唯物論との二者の何れかゞ眞にして、他は僞であると主張するもの、(2)倫理的又は其の他の見地から見て、二者の何れかゞ他よりも優れて居ると主張するもの、(3)二者の何れも相對的に同等に正當或は眞であつて、其の間に優劣の別がないと見ると同時に、絶對的に正當或は眞と認めらる可き根本方針は存在しないと見るもの等に、區別されると思はれる。但し(1)は又觀念論を唯一の眞の方針と認めて、唯物論を排斥するものと、逆に唯物論を唯一の眞の方針と認めて觀念論を排斥せんとするものとに別たれ、(2)は又觀念論を以て唯物論よ

りも優れた方針であると主張するものと、逆に唯物論を以て觀念論よりも優れた方針であると主張するものとに別たれる。併し私は此處で其等の各部類に就て、夫れに屬する主要な諸説だけでも一々批判的に考察する暇はないから、只各部類に於て代表的と思はれるもの一つ々を選び出し、之を一般的に考察するに止めざるを得ない。そうして現今の我國の思想界一般の狀勢から見て、先づ第一に、唯物論を唯一の眞の方針と主張する諸説の代表的なもの一として、辨證法的唯物論の主張を比較的の稍々詳しく考察したいと思ふ。

二、辨證法的唯物論の主張の考察

辨證法的唯物論の創設者の一人エンゲルスは彼の著書 *Ludwig Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie*, 1888 の II の中に、彼が哲學の根本方針は觀念論と唯物論との二者であると認める理由、及び唯物論を以て唯一の眞の方針と主張する理由を、簡明に論述して居る。そうして其の論述によると、

人間が尙は自分の肉體の構造に就ては全く無知であつて、そうして夢の現象によりて注意を惹起されて、人間の思惟及び感覺は人間の肉體の一活動ではなく、此の肉體の中に住んで居て、死亡の際にはこれを去つて行く一の特殊的靈魂の作用であると云ふ表象に到達した其の遠い太古の時代以來、人間は此の靈魂と外界との關係を問題とし、此の問題に就て何とか考へを決定しなければならなかつたのである。處で靈魂は肉體の死亡の際に、肉體を離れ去つて生き續けて行くものとすれば、最早靈魂に就て何等特殊的死亡を工夫する機會はなくなつて仕舞ふ。かくて此處に靈魂不滅の表象が発生したのである。但し人間の發達の其の階段にありては、靈魂不滅の表象は決して人間に對する一の慰安として現はれて居るのではなく、人間が避け得ない

一の運命として、又希臘人の間に於ての如く、甚だ屢々一の積極的な不幸として現はれて居る。されば個人的不滅と云ふ様な下らない想像に、人間を一般的に導いて行つたのは、宗教的慰安の欲求ではなく、一たび承認された靈魂を、肉體の死後どう始末をすればよいか、人間が同様な一般的無智からして當惑或は困惑して來たと云ふことである。又夫れと同様な経路を経て、自然の諸勢力の人格化からして、最初の神々が生まれ、其等の神々は宗教が益々發達するにつれて、益々世界的形態をとり、そうして遂には精神的發達の進行中に自から生成してくる抽象過程、或は蒸溜過程と稱したいと思ふものによりて、大なり小なり制限され、又相互に制限し合ふ多數の神々から、唯一人格神教の排他的神の表象が、人間の頭の中に生まれて來たのである。

されば全哲學の最高問題、思惟と存在、精神と自然との關係の問題は、一切の宗教と同様に野蠻時代の偏狹無智な諸表象に於て、夫れの根柢を有するのである。併し此の問題は、歐羅巴人が基督教的中世紀の永い冬眠から醒めた時に、始めて夫れに充分な鋭さに於て產出され、又夫れの全意義を獲得することが出來たのである。存在に對する思惟の地位の問題、とにかく中世紀のスコラ派にありても大なる役目を演じた問題、精神と自然との何れが本來的であるかと云ふ問題、此の問題は教會が好まなかつたに拘らず、神が世界を創造したのであるか、又は世界は永遠から存在して居るのであるかと云ふ問題にまで、尖鋭化されたのである。

今此の問題がどう答解されるかに従つて、此處に哲學は二大陣營に分裂した。そうして自然に對して精神の原本性を主張し、かくて結局は何れかの種類の世界創造を認容する哲學者は、觀念論の陣營を形成したが、之れに反して自然を本來的なものとして觀た他の哲學者は、唯物論の陣營に屬して居る。

觀念論及び唯物論と云ふ二つの言葉は、本來的には右に述べしこと以外の何物をも意味しない。そうして此處でもヤハリ他の意味で用ひられて居ない。人若し之れと異なる何等かの意味を此等の言葉中に運び込むらば、どんな混雜が生ずるかば、後に示すであらう。

併し思惟と存在との關係は更に左の方面を有つて居る。即ち吾人を圍繞する世界に關する吾人の思想は、此の世界其物と如何に關係するかと云ふ方面である。吾人の思惟は現實的世界を認識することが出来るか、吾人は現實な世界に關する吾人の表象及び概念に於て、現實態の正當な映像を作り得るか。此の問題は哲學的術語に於ては、思惟と存在との同一性の問題と稱せられ、そうして哲學者の大多數によりて肯定的に解決されて居る。例へばヘーゲルにありては、此の問題の肯定的答解は當然

である。是れ彼の考へる處によれば、吾人が現實的世界に於て認識するものは、まさしく世界の思想的内容（即ち世界をして、永遠の昔より世界から獨立して、又世界の以前に何處かで存在して居た絶對的理念の、階段的實現とならしめるもの）であるからである。そうしてそうであるとすれば、思惟が本來思想内容である世界の内容を認識し得ると云ふことは、云ふまでもなく明白な事柄である。まさしく同様に、此の場合には證明さる可きものが、既にコッソリと前定の中に入れ込まれて居ることも甚だ明白である。さはれヘーゲルにありては此のことは彼が思惟と存在との同一性に關する彼の證明からして、更に進んで左の如き論結を引き出す妨げにはならなかつた。即ち彼の哲學は彼の思惟に對して正當であるが故に、今や又唯一の正當なものであると云ふこと、及び思惟と存在との同一性は、人類は直ちに彼の哲學を理論から實踐に移し、ヘーゲルの原則に従ふて世界を改造することに於て、證明さる可きであると云ふこと。是れはまさしく彼が殆んど總ての哲學者と共有せる一の幻想である。併しヘーゲルの如き哲學者と相並んで、世界の認識の可能性、或は少なくとも世界の残りなき認識の可能性を、問題とする他の哲學者の一連がある。近世哲學者の間にありては、ヒューム及びカントは之れに屬して居る。そうして彼等は哲學の發達に於て甚だ重要な役目を演じたのである。併しかゝる見解に對する反駁の決定的なるものは、觀念論的立場からして可能である限りは、既にヘーゲルによりて與へられて居た。フオイエルバッハが之れに附け加へた唯物論的反駁は、深刻であるよりは寧ろ巧妙であると思はれる。併しかゝる見解に對する最も斷乎たる駁撃を加へるものは、總ての他の哲學的狂想に對すると同じく、實踐即ち實驗と産業とである。吾人若し一の自然過程に關する吾人の理解の正當性を、吾人が其の自然過程其物を作り、之を其の諸條件から產出し、殊に之を吾人の目的に役立たせ得ることによりて、證明することが出来るのであるならば、カントの把握され難き「物自體」なるものも、容易に片づけられる可きである。植物及び動物の體内に於て產出される化學的諸物質は、有機化學が順々に之を闡明し始めるまでは、カントの所謂把握され難き「物自體」であつたのであるが、夫れからしては「物自體」は吾人に對して、例へば茜の色素アリツアリンの如く、吾人が最早畑で茜の根の中に生長させる必要なく、コールタールから遙に廉價に又より簡單に製造する一の物となつた。コペルニクスの大陽系は三百年間も永く一の假説であつた。夫れは一對百、千、萬賭けてもよい程確かであると思はれたが、しかもヤハリ一の假説であつた。併しルガエリエルが此の體系によりて與へられたる材料からして、未知の一遊星の存在の必然性を算定するのみならず、更に此の遊星が天界に於て占める可き位地をも算定した時、又ガルレが次に此の遊星を現實に發見した時、此處にコペルニクスの大陽系が證明されたのである。然るに近來獨逸にありてはカント説の復活が新カント派の人々によりて、又英國にありてはヒューム説の復活が不可知論者により

て企たてられて居るのは、是れは久しき以前に遂行された理論的及び實踐的駁撃を無視して居るので、科學的には一の退歩、實際的には唯物論を密かに受け容れながら、世間でいでは之を否定して居る様に見せやうとする、一の耻づ可き所作に外ならないのである。併し哲學者等は、デカートからヘーゲルに至るまで、又ホッブスからフオイエルバッハに至るまでの此の長い時期に於て、決して、彼等が信じて居た様に、只純思想の力によりてのみ推し進められて居たのではない。それとは反對に、眞に彼等を推し進めたものは、即ち自然科學及び産業の強大な、益々迅速に突進する進歩であつたのである。此のことは唯物論者において、既に表面上に現はれて居た。併し觀念論的諸體系も亦、益々唯物論的内容を以て充たされ、精神と物質との對立を汎神論的に融和しようと企たてゝ居た。かくて結局ヘーゲル體系は、方法及び内容に於て、觀念論的に逆立ちして居る一の唯物論を表現するものに外ならないのである。

エンゲルスは以上述べし如くに、哲學の最高問題は思惟と存在との關係、精神と自然或物質との關係の問題であると認め、そうして先づ形而上學的（エンゲルスは形而上學を排斥して居るが、學問論上から嚴密に考察すれば、思惟と存在との關係とか、精神と自然との關係とか云ふが如き問題を、彼の解するが如き意味にて解するに於ては、夫れは明かに形而上學的一問）に考察題にして、そうして物質を唯一の原本的存在と見るが如き彼の説は、明かに形而上學的一學說であるのである。そして、思惟或は精神を原本的なもの、存在或は自然を夫れから派生せるもの、或は夫れによりて產出されるものと見るか、又は之れに反して、存在或は物質を唯一の原本なもの、思惟或は精神は夫れから派生せるもの、或は夫れによりて產出されるものと見るかによりて、哲學は根本的に觀念論と唯物論との二大陣營に分れるものであると認めると同時に、觀念論を其の起源から考究して虚妄な空想であると判定し、唯物論を以て唯一の眞實な哲學の方針であると主張し、次に認識論的に考察して、思惟と存在或は精神と自然との同一性と云ふヘーゲル哲學の原理を逆に解釋し、思惟或は精神は本來存在或は自然から派生し、夫れによりて產出されるものであるから、

夫れを残りなく認識し得るものであると認めて、カント的な物自體認識不可能説や不可知論などを排斥し、そうして實踐即ち實驗と産業とを以て認識の規準と見る、新しき唯物論的認識論を創説し、更に其の認識論の立場からして、古來哲學發達の原動力となつて居たものは、哲學者が一般に信じて居た様な、純思想の力ではなくして、實踐的に獲得されたる實證的知識及び夫れの實際的應用、即ち自然科學及び産業の進歩であるので、かくて自然科學及び産業の進歩に従ふて、唯物論は益々確證され、益々堅固に確立されるに反して、觀念論は益々衰滅す可きであると考へたのである。

今エンゲルスの右の見解は、唯物論哲學の基礎附けとして如何に重大な意義を有するものであるかは、今日世界の思想界に於て、唯物論哲學として最とも強大な勢力を振ひつゝある辯證法的唯物論が、其の哲學的基礎附けとして、全然右のエンゲルスの見解を採用して居ることによりて察知される。是れ私が此處にエンゲルスの右の見解をやゝ詳しく述べた所以である。今やマルクス・レーニン主義辯證法的唯物論は、今日の露西亞政府がプロレタリアト世界觀として、夫れの組織的建設及び發達を大に獎勵し、否な命令して居るものであつて、近來純理論上から見ても注目すべき著書が、幾多公にされて來た。そうして米國や英國の學者までも、一般に之れに注意し出して來たことは、一昨年米國で出版されたニュー・ヨーク大學哲學助教授 Sydney Hook の著 *Towards the Understanding of Karl Marx* が廣く讀まれたと云ふことや、又昨年英國で出版された

Aspects of Dialectical Materialism と題する論文集の緒言中に、「此等の諸論文は、近代露西亞の實踐を指導して居る哲學が、一般の人々にも理解し得られる形態に於て解説されたいと云ふ、之れに對して興味或は關心を有する大數の人々の熱誠な要求に應じて、The Society for Cultural Relations (文化關係協會) が開催せる講演會及び討論會に於ける、諸講演及び諸討論の一連から生まれたものである」と、云はれて居ることによりて推察される。

私は此處に、今日の露西亞の辨證法的唯物論が其の哲學的基礎附けとして、右に述べしエンゲルスの見解を殆んど其儘に採用して居ることを示す一例として、昨年同國の大學や専門學校に於ける哲學の教科書^{ウチエボク}として、コムニステイチエスキ・アカデミアの哲學部の人々が、ミーティンの監修の下で編纂して出版せる「辨證法的唯物論」Dialekticheskii Materializm の第二章中に述べられて居ることを、左に少しく擧げて置く。

(但し本書は目下輸入を禁止されて居るが、廣島氏はミーチン監修書中の言述は廣島氏の譯によるものである。尙ほ私が此處に同書中から引用せる言述は、後に私が加へんとする批判)の主旨を明かにする爲めに、特に適當と思はれるものだけである。詳しくは廣島氏の譯書を閱讀されることを望む。)

「言葉の綾をつけた數限りなき哲學體系の蔭に、哲學者が自分の學說に張りつけた色とりどりの貼札の蔭に、哲學上の二つの根本方向、唯物論と觀念論との、長い間の激しい闘争がひそんで居る。哲學史なるものは複雑して居るが、結局この二つの相反目する哲學流派の闘争と發展の歴史である。すべての哲學的潮流や學說はこの二つの根本流派の一亞種である。各々の哲學々説は公然とこれを述べ立てゝ居るにせよ、又はどうかして之を隠さうとして居るにせよ、必ずや觀念論の陣營か唯物論の陣營かに與みして居る。この二つの流派の外に立ち、それ以上に出で、それを超越せんとして、何か新しい哲學、新しい觀念論哲學を創造せんとする要求は、現代のブルジョア哲學者の或る者が自分の觀念論への所屬を蔽ひ隠くす爲めに用ひる手に過ぎず、自分の唯物論を隠して公然と宣言し得ない氣兼ね、又はどちらともつかない動搖、哲學的混ぜ物、折衷派、混亂に外

ならない。」廣島氏譯四五頁、

「それでは、哲學上の主要流派の根本的な相違はどこにあるのか、如何なる學說が唯物論に屬し、如何なる學說を觀念論に入れるべきか。

唯物論と觀念論との相違は、哲學の根本問題、思惟と存在との關係の問題に對する、兩者の相反した解決に根ざして居る。……存在、客觀的世界、自然、物質を、第一次的なものと認め、思惟、主觀、認識、精神を、第二次的なもの、派生的なものと認める、すべての哲學々説は唯物論の陣營に屬する。之れに反して、精神、觀念、主觀、人間の意識を、第一次的なもの、根本的なものとして認め、外的な客觀的世界、物質的現實性を第二次的なもの、意識に依存するものと見做す人々は、觀念論に屬する。この根本問題をどう解決するかといふことから、研究の全般に亘つて相違が生じてくる。この問題のうちに、哲學上の相違の中心點があるのだ。哲學的見解の闘争における個々の學說の地位は、根本に於て、その學說が物質と意識との問題において、如何なる立場を占めてゐるか、物質と意識とのいづれを第一次的と見做し、いづれを第二次的と見做すか、どこに存在及び認識を理解するための鍵を見るか、といふことによつて決定される。」廣島氏譯四八頁。

「觀念論は宗教と直接に相通じてゐる。宗教と同じく觀念論も精靈說的世界觀を發展させ精製したものである。すなはち、人間になぞらへて物に魂を吹き込み、物に精神や意志を宿らせたものである。觀念論と宗教とは共通の源を有してゐる、ばかりでなく、その社會的任務や目的も同じである。觀念論哲學は、宗教が單純率直に實現する同じイデオロギーの機能を、一層巧妙に、科學的形式で果すのである。例外なくすべての形態の觀念論哲學は、どんな装ひをしてゐても、宗教の辯明に外ならない。仔細に検討するときは、觀念論の根本問題も、宗教的イデオロギーの基礎と同じものであることがわかる。……それ故に、反宗教闘争は必ず觀念論の暴露を必要とし、また觀念論を克服することは、科學における坊主主義と戦ふことである。」廣島氏譯五〇頁、

「人間の認識は客觀的世界の法則の反映過程である。しかし、この反映は固定したものでも、死んだものでもない。否な認識の過程は一の運動である。」同五二頁。

却說現代の唯物論哲學に於て最も大なる勢力を振ふて居るマルクス・エンゲルス辯證法的唯物論、又レーニンを通して一定の方向に益々發展され、ソビエト露西亞の國民哲學或は同國現政府

の御用哲學として、建設されつゝある今日の露西亞辯證法的唯物論は、上に述べしが如き意味にて哲學の根本方針は、觀念論と唯物論との二方針にして、夫れ以外には何れの方針も確立され得ないと考へ、そうして唯物論を以て唯一眞實の哲學方針であると主張するのであるが、此處では云ふまでもなく、私は之を詳しく批判する暇を有せず、又始めから之を試みようとして居ない。只哲學の根本的方针は、唯物論と觀念論との外に一も存在せず、又唯物論は唯一眞實の方針であると主張する其の見解を、根本的ではあるが、甚だ一般的に批判せんとするだけである。

今哲學の根本問題或は最高問題は、思惟と存在或は精神と自然、物質との關係問題であると認め、兩者の何れを原本的であるとして指定し、何れを派生的であると考へるかによりて、觀念論と唯物論との相對立する二つの根本方針が樹立されるのであるとなし、そうして自然或は物質は原本的なものにして、思惟或は精神或は觀念は夫れから派生するもの、或は夫れによりて產出されるもの、かくて人間の認識は物質世界、客觀的世界の反映過程にして、夫れの眞理性即ち現實性及び力は、實踐即ち實驗及び産業によりて證明されると觀る唯物論が、唯一の眞實の哲學方針であると主張する辯證法的唯物論の立場が、純理論的に見て正當である爲めには、或は眞實である爲めには、先づ何よりも第一に肝要なるは、精神、思惟、觀念が自然から、物質から如何に派生するか、或は自然によりて、物質によりて如何に產出されるか、實踐によりて即ち實驗及び産業によりて證明されると云ふことである。處で物理學や化學に關する、又諸般の工學に關する

私の知識が淺薄である爲めか、又は隱遁的學究生活を送つて居る私の寡聞なるが爲めか、未だ精神や思惟や觀念を物質から作り出す器械が發明されたことも、かゝる工場が設立されたことも、かゝる産業の興つて居ることも聞かない、否なかゝる實驗を試みて居る物理學研究所や化學研究所のあるのさへも聞かない。併し眞理は只實踐に於て、即ち實驗及び産業によりてのみ證明されるものである限り、物質或は自然が原本的なものにして、思惟、精神、觀念が夫れから派生し、夫れによりて産出されることを主張する唯物論が、唯一の眞の哲學方針である爲めには、上に述べしが器械が發明されて居るか、工場が設立されて居るか、産業が興つて居るか、少なくとも實驗が成功して居なければならぬ。そして私は少なくとも上に述べしが如き實驗が、タトヒまだ成功して居なくとも、多少なりとも有望と認め得られるに至るまでは、今日の辨證法的唯物論が主張するが如くに、トテム唯物論を唯一の眞の哲學方針とは考へることは出來ないのである。

併し私は辨證法的唯物論が、物質或は自然は思惟或は精神によりて、自己疎外としてか、又は其他何れかの過程によりて、産出されるものと見る觀念論的説明或は解釋を排斥し、物質の本性を主張する點に於て、其の主張を承認する。更に運動は物質の定存在仕方^{ダイインスワイゼ}にして、物質は本來夫れ自身で運動するものであること、即ち物質の自己運動性を措定する點に於て、(但し其の運動は必然的に辨證法的であらねばならぬとは考へないが)ヤハリ辨證法的唯物論の主張を承認する。是れは今日の物理學に於て證明されて居ることと思ふ。されど物質は本來如何に自己運動をなすものであると

しても、物質の自己運動からして精神が産出されるとは考へることが出来ない。要するに私は辨證法的唯物論は、物質の原本性及び自己運動性を主張する點に於て正當であると認めるが、併し物質は精神を産出すると主張する點に於ては、辨證法的唯物論其物の認識論的原理、即ち眞理は只實踐即ち實驗及び産業によりてのみ證明されるものであると云ふ原理によりて、其の主張は一の獨斷的なものであるとして排斥せんとするのである。

簡單ながら以上論述せる處によりて、私は相對立する哲學の根本的の二方針としての觀念論と唯物論とに就て、觀念論を排斥し、唯物論を唯一の眞の哲學方針と認めんとする辨證法的唯物論の主張に於て、根本的には如何なる點を承認し、如何なる點を排斥せんとするかを指示したと思ふが、尙ほ後に論述せんとする私の見解から見て、今日の辨證法的唯物論の哲學論中、上に述べしことと連絡するものにして、此處に特に注目して置きたい點がある。夫れはさきに擧げしミーテイン監修「辨證法的唯物論」に於ても、亦同一の目的を以て、同書の前にシロコフ、アイゼンベルグ其他の人々によりて公にされた「辨證法的唯物論教程」に於ても、大に強調されて居る哲學の黨派性である。詳しく云へば哲學が根本的に相對立し、相排斥し合ふ觀念論と唯物論との二方針に於て發展するのは、是れ哲學は本來階級的なものであるが爲めであつて、そうして觀念論はブルジョア階級の利益を圖り、之を辨護する爲めの同階級の哲學、又唯物論はプロレタリア階級の利益を圖り、之を辨護する爲めの同階級の哲學であるが故に、兩者は相對立し、相排斥し合ふので

あると見る思想である。

辨證法的唯物論は右に述べしが如き思想を、夫れの哲學論或は學問論の根柢に据へ附けて居るのであるから、さきに述べし如く、物質が精神を産出すると云ふ夫れの最根本的原理の一部分は、夫れ自身の認識論の根本原理によりて證明されて居ないのに拘らず、かくて純理論的には其の最根本的原理の一部分は、トテモ維持され難きものであるに拘らず、敢て唯物論を固持し、主張して居るのであることが、了解されると思はれる。要するに辨證法的唯物論は、夫れの最根本的原理の全體を純理論的に基礎附けて主張して居るのでなく、其の最根本的原理の一部分は、全く實際的理由から主張されて居るものであると思はれる。尙ほ更に深く探究して行くと、其の最根本的原理中の純理論的に眞實と認めらる可き部分も、つまりは右の實際的理由によりて大に制約されて居ると思はれるのである。併し其の實際的理由を全く階級的利益に基因するものと見るのは分析不足の結果であつて、更に深く分析して行けば、哲學の根本の方針の區別は、結局は哲學する人々の人格性の精神典型、即ち私が哲學的或は世界觀的人格典型とか、或は哲學に於ける人間の精神典型とか稱したいと思ふものの區別に依存するものであることが、發見されると思はれるのである。少々詳しくは後に哲學的或は世界觀的人格典型説として論述したいと思ふから、此處では只、私は辨證法的唯物論の哲學黨派性論を如何に批判せんとするかを、單に指示するだけに止めて置く。

却說私は本論文の始めに述べし如くに、觀念論と唯物論とを哲學の相對立する根本的ニ方針と見る一般の見解に就て、先づ第一に注目す可きものと考へる處の、兩者の何れかを唯一の眞の方針と認めて他を排斥する諸説の二部類の中で、先づ唯物論を唯一の眞の方針と認めて、觀念論を排斥する部類の代表的なものとして、辨證法的唯物論の説を、上に述べし如くに考察し、批判したのであるが、それで次には觀念論を唯一の眞の方針と認めて、唯物論を排斥する部類の諸説を考察し、批判せねばならない。そうして私は此處に此の部類の諸説の代表的なものとしてヘーゲル及びベルグソンの説を考察し、批判するつもりであつたが、辨證法的唯物論の考察及び批判に、紙數を費やしすぎたが爲め、又次にフイヒテの説を考察し批判する場合には、自から觀念論を唯一の眞の方針と見る説一般にも論し及ばさねばならないから、此の方針に就ては、此處では只私が之れに加へんとする批判の根本點を極簡單に述べるだけに止めて置く。

要するに私は上に述べし如くに、唯物論を唯一の眞の方針と見る諸説の代表者としての辨證法的唯物論が、物質を一の原本的なものと認めるのは、理論的に考へて正當或は眞理であるが、併し物質は唯一の原本的なものにして、精神は如何様にかして物質によりて産出されるものであると主張するのは、理論的に考へて正當或は眞理でないと考へるのであるが、夫れとは逆に觀念論を唯一の眞の方針であると主張する諸説が、精神或は觀念を一の原本的なものとして指定するのは、理論的に考へて正當或は眞理であるが、併し精神は唯一の原本的なものにして、物質は如何

様にかして精神から分出するものであるとか、又は精神によりて産出されるものであるとか主張するのは、理論的に考へて正當或は眞理でないと考へるのである。そうして觀念論者が精神が如何にして物質を産出するか、又は之を分出するかを、理論的に充分に説明し、人々をして理論的に満足させることが出来ないのに拘らず、又恐らくは自分自身も満足して居ないと思はれるに拘らず、ヤハリ精神を唯一の原本的なものと見る立場を固持して居るのは、つまりは實際的理由によるもの、即ち其の人の哲學的或は世界觀的人格典型或は精神典型が、觀念論的であるが爲めであると思はれる。

三、フィヒテの説の批判的考察

私は次に觀念論と唯物論との何れかゞ他に優れた眞の哲學方針である見る諸説の代表的ものの一として、フィヒテの説を考察するが、今フィヒテは哲學の根本方針は觀念論と獨斷論或は唯物論との二つに分れる所以を論究し、そうして人々が其の何れを奉ずるかは、根本的には純理論的に決定されるのではなく、つまりは其の人の人格性によりて決定されるものと考へ、かくて一定の意味に於ては右の二つの根本方針を同等に正當視するものの如くに思はれるが、併しそれと同時に彼は、又獨斷論或は唯物論を奉ずる人々の人格性は、觀念論を奉ずる人々の人格性よりも倫理的知力的に劣等なものゝの如くに論じて居る。かくて彼は一定の意味に於ては二つの根本方針を同等に正

當視して居るが、併し結局は觀念論を優れた眞の方針と考へて居たと思はれるのである。此處に右の如き彼の見解の主旨を、彼が千七百九十七年に *Philosophisches Journal* Bd. V. に於て公にせる論文 *Erste Einleitung in die Wissenschaftslehre* 中に論述して居ることによりて示して置く。Johann Gottlieb Fichtes *Sämmtliche Werke*. Herausgegeben von J. H. Fichte, Erster Band, SS. 419-449.

フイヒテが同論文に於て論述して居る處によると、哲學の根本問題は經驗の基礎は何であるかと云ふ問題であるが、今一切の經驗の基礎は經驗の外に存在せねばならない。併し吾人は如何にして經驗以上に上ることが出来るか。夫れは即ち抽象によりてである。詳しく云へば一切の經驗の中に結合されて居るもの、物 (*das Ding*) 或は客觀 (*Objekt*) と認識する叡智 (*Intelligenz*) とを分離することによりてである。かくて吾人は物自體論 (*die Lehre von den Dingen an sich*) 即ち獨斷論か、又は叡智自體論 (*die Lehre von der Intelligenz an sich*) 即ち觀念論かに到達するのである。されば獨斷論 (但しフイヒテは同論文第五節中に徹底的獨斷論者は又唯物論者であると述べて居る) と觀念論とは哲學體系の二つの根本形態である。そうして獨斷論に従へば叡智或は自我は物自體の產物にして、かくて非獨立的非自由的なものであるが、觀念論に従へば物的世界 (*eine dingliche Welt*) の全表象即ちまさしく經驗は叡智から生まれるものである。されば此等二つの哲學的體系の論争は、自我の獨立性が犧牲に供せられねばならないか、又は物の獨立性が犧牲に供せられねばならないかと云ふ問題の周圍を廻轉して居るのである。所で此の問題は純論理的な途に於ては到底解決し得られないものにして、或人が如何なる哲學を選ぶかは、其人は如何なる人間であるかによりて定まるのである。是れ哲學體系は人々が任意に斥けたり、又は受け入れたることが出来る様な死んだ道具ではなく、之を所有する人間の魂によりて魂づけられて居るものであるからである。生れつき懦弱な、無氣力な、懶惰な、或は精神的奴隷性や人爲的奢侈及び虛榮心によりて眠らされ、曲められた性格の人間は、決して自から觀念論にまで上らないであらう。吾人は獨斷論者に對して、彼の哲學體系の不充分なこと、及び不徹底的なことを指摘して、又證明して、大に彼を困らせ悩まさせることは出来るが、併し彼をして彼の獨斷論の謬つて居ることを、決して覺らせ、確信させることは出来ない。是れ何人も自分が率直に受け容れ、又は辛抱して聽聞することの出来ない事に、よく耳を傾けて、心靜かに又は冷靜に、之を吟味して行くことは出来ないからである。何人でも觀念論を唯一の眞實な哲學として認め得るには、其の人は哲學にまで教養され、又自から己を哲學にまで教養する様本來哲學者に生まれて居なければならぬ。如何なる人間的技術によりても、哲學

者に生まれて居ない人間を、哲學者に作り上げることは出来ない。

今右に述べし處によりて、フイヒテはエンゲルスよりも數十年前に大體上同様な理由によりて判然、哲學は根本的には觀念論と獨斷論或は唯物論との二方針に分たれるものなることを、明かに論述して居たことが學ばれる。併し彼自身は觀念論者でありながら、エンゲルスが彼自身唯物論者であるが故に、直ちに觀念論を妄想的なものとして排斥したのとは異なつて、直ちに唯物論或は獨斷論を排斥せず、そうして人々が兩者の何れを選ぶかは、純理論的思惟によりて決定されるものでなく、つまりは其の人の性格或は人格性によりて決定されるもの、即ち「人が如何なる哲學を選ぶかは、其の人は如何なる人間であるかによりて定まる」と、認めて居たのである。かくて彼の思想は私が唱へんとする哲學的或は世界觀的人格典型説に、大に接近して居る様に思はれる。併し彼が上に述べし如くに、更に唯物論或は獨斷論を選ぶ人々は、如何なる性格或は人格性を具有する人間であるかを、論述して居ることを考へ合せると、唯物論或は獨斷論は哲學としては劣等なものとして蔑視し、自分の奉ずる觀念論を以て眞實な哲學と信んじて居たことが推察される。要するにフイヒテは純理論的に見れば、觀念論も唯物論も同位的或は等價的に樹立されるものであるが、併し哲學が充足する全人格的要求から、或は根本的に哲學を生み出す全人格性の上から倫理的に考察すれば、觀念論は高等な人格性の世界觀的要求を充足し、又高等な人格性が本然的に生み出す優れた、眞實な哲學にして、唯物論は之れに反して劣等な人格性の世界觀

求を充足し、又劣等な人格性が本然的に生み出す劣等な哲學であると信じて居たと思はれるのである。

哲學史或は汎く精神史を考究すると、純理論的に見て觀念論が優れた眞實な哲學であると云ふだけでなく、殊に倫理的に見て優秀な人格者の唱へる優れた眞實な哲學にして、之れに反して唯物論は純理論的に見れば淺薄な哲學であるばかりでなく、倫理的に見て劣等な人格性の唱へる劣等な哲學であると考へる謬見或は偏見は、古くから一般に行はれて居たものであることが學ばれる。されば上に述べし處によりて考ふれば、フイヒテは純理論的には觀念論と唯物論とは哲學の二つの同位的な根本方針であるが如くに論じて居たことによりて、彼は右の偏見或は謬見の前半から大體上脱却して居たが、併し其の後半からは尙ほ脱却して居なかつたことが覺られるのである。されど私は觀念論を唱へる人々が、必ずしも倫理的に優れた、尊敬す可き人格者でないこと、又唯物論を唱へる人々は、必ずしも劣等な、尊敬し難い人格者でないことは、哲學史や精神史を探らなくとも、自分が直接間接に日常接觸して居る人々の範圍内に於て考へるも、明白であると思ふ。あまり廣くない私の友人知己の範圍内に於ても、私が學識人格共に最とも尊敬して居る觀念論者があれば、又唯物論者もある。そうして私は哲學上觀念論を唱へて居るか、唯物論を唱へて居るかは、其の人の人格性の倫理的優劣とは全く關係のないものと、私自身の經驗上からして堅く信じて疑はないのである。要するに私はフイヒテの如く、純理論的に考へて、觀念論と

唯物論との間に優劣の別がないと認めるだけでなく、更に倫理的に考へても、觀念論者の人格性と唯物論者の人格性との間に、優劣の別がないと確信して居る。かくて私は觀念論と唯物論との間には、純理論的にも亦倫理的にも優劣はないが、併し二者は根本的に相異なつて居る二つの哲學的或は世界觀的人格典型の產物であると、認めんとするのである。そうして私がかゝる思想を始めて思ひ附いたのは、上に述べしフイヒテの説を學んでからであるが、併し之を大體上確立するに至つたのは、主としてデイルタイ及びジムメルの思想の影響によつてゐる。

四、デイルタイの世界觀典型論

デイルタイはカナリ早くから、哲學の本質や、哲學の根本方針の區別に就て、斷片的に論述して居たか、併し之をとりまとめて組織的一般的に論述して居るのは、彼の晩年の著述、千九百七年の *Das Wesen der Philosophie* 及び千九百十年（彼の永眠の前年）の *Die Typen der Weltanschauung* に於てゐると思はれる。そうして私が私の世界觀的人格典型説と稱するものを築き上げるに就て、先づ大に學ぶ處のあつたのは、デイルタイの哲學本質論や世界觀典型論であるから、此處に之を稍々詳しく説述したのであるが、併し其餘白はないから、只彼が世界觀の諸典型と稱するものに就て、私が哲學の根本方針の區別に關する彼の思想の主要點と認めるものを、極簡単に述べるだけに止める。但し極簡単に述べる便宜上、左に述べることは *Ueberwegs Grundriss*

der Geschichte der Philosophie. Vierter Teil. Die deutsche Philosophie des neunzehnten Jahrhunderts und der Gegenwart. Völlig neubearbeitet von T. K. Oesterreich に依れるものである。

デイルタイの考へる處によれば、哲學的世界觀は宗教的世界觀と異なつて、普遍性及び普遍妥當性を狙ひ、又詩的世界觀と異なつて、人生を改良せんとする一の力であらんことを望む。そして常に繰り返して現はれる、哲學的世界觀の三つの判然した典型が區別し得られる。第一の典型は唯物論—實證論である。夫れは自然の研究から出發し、世界を因果的に規定されたる一全體と觀じ、價值及び目的の概念には地位を與へず、精神的世界を物理的世界から説明しようとする。そして物理的世界の現象的性格が認識されると、此處に唯物論は所謂實證論に轉化するのである。第二の典型は客觀的觀念論である。此の世界觀形式は感情生活、物の價值の見地、世界の意義及び意味の見地によりて規定されて居るので、かくて此の世界觀形式は現實態を一の内的なもの表現と觀じ、無意識的又は意識的に作用する一の連結の展開として把捉する。汎神論及び萬有在神論は此の見地の諸形態である。第三の典型は自由の觀念論である。夫れは人間の意志經驗から出發し、自然からの精神の獨立性、精神の主權及び超越性等を措定する。そして夫れは又此等の概念を宇宙の上に投射することによりて、神的人格性の概念及び創造の概念を生み出すのである。

デイルタイは右に述べしが如き世界觀の三典型を、右に述べしが如き基礎或は理由に基いて設

定し、そして其等の三世界觀の何れが唯一の眞實な世界觀であるかを、理論的にも亦實際的にも決斷することは不可能であると考へた。是れ彼の見る處によれば、因果性の見地の下で成就される現實態認識、價值、意義及び意味の體驗、意志態度等は、吾人が吾人を世界と關係させ、或は世界に結び附ける處の三つの相異なる、又相並立する可能性、相互に他に還元され得ない三つの基礎的範疇であるからである。さればデイルタイは右の三つの世界觀典型を、理論的にも亦倫理的にも或は實際的にも三つの同位的典型と認めて居たことは明白である。所で彼が第二の典型及び第三の典型と稱する客觀的觀念論及び自由の觀念論なるものは、其の名稱其物によりて推察される如く、觀念論の二種或は二形態であることは明かであるから、かくて彼は結局世界觀の典型或は哲學の根本方針を、唯物論と觀念論との二つに大別し、そして兩者は理論的にも亦倫理的或は實際的にも、同位的なものであると考へて居たことが學ばれるのである。然らば彼は世界觀の此等の諸典型或は哲學の此等の根本方針の區別は、根本的に何に基いて成立すると考へたか、此の點に於ける彼の思想は判然學び得られない。併し私は上にフイヒテの説を考察する際に述べし如くに、夫れはつまりは私が人格性の世界觀的或は哲學的精神典型或は世界觀的人格典型と稱せんとするものの區別に基づくものと考へるのである。そして私が此の如くに考へて、私が世界觀的或は哲學的人格典型説と稱せんとするものを確立せんとするに當つて、最後に決定的影響を受けたのはジューメル思想からである。それで次にジューメルの説に付て少し詳しく述べたいと思ふ。